

下落合を過ぎてから車窓から聞こえてくる音はレールのつなぎ目の音の他に、踏切の警報の音。西武新宿線が
いかに踏切が多い路線か、ということがわかる。沼袋から西に向かっていた電車は西北西に進路を変えて、環
状七号線を跨いで**野方**駅に入る。戦国時代から江戸時代にかけて、このあたり一帯を「野方領」と呼んでいた
ことが地名の由来であるが、この呼称の意味する範囲は武蔵国多摩郡・豊島郡・新座郡の他に 128 ケ村に及
ぶものだった。つまり「野方」とは「野」の「方」を意味する言葉で、広いエリア(野)のことを意味している。

明治 22 年に上鷺宮・下鷺宮・上沼袋・下沼袋・上高田・新井・江古田の七村が合併した時に、地域を総称する
「野方」が新しい村の名前として採用されたということだった。

都立家政駅が出来たのは昭和 12 年(1937 年)で、その時には「府立家政」だった。府立中野高等家政女学
校が中野区桃園からここへ移転してきた時に、生徒の父母や学校側からの陳情によりこの駅が誕生した。

1943 年に府立から都立に改称されたが、学校名が中野高等家政女学校から鷺宮高等学校に変わった時には
駅名の変更はされなかった。校名が変わった時に、西武鉄道としては東鷺ノ宮駅に改称したかったが、駅近くに
「家政銀座商店街」が出来たりして「家政」の名が浸透していたことから、地元の同意が得られなかったらしい。
しかし、陳情を受けて開設した新駅は次の鷺ノ宮駅と 350m しか離れていなく、今となっては目の上のたんこぶ
なのではないかと思う。(鷺宮高等学校はここ <https://yahoo.jp/OSJopZ>)

鷺ノ宮で急行電車二本を先行させるために、長い停車時間になったが、こちらは急ぐ旅でもないで周りの景
色を眺めて楽しんだ。「鷺」の「宮」という何かきれいな逸話が背景にありそうな地名だが、地図を見ると何と、
駅の名前は「鷺ノ宮」だが、町の名前は「中野区鷺宮」。

1064 年(康平7年)源頼義がこの地に八幡様を祀った。境内に白鷺が飛来していたことから里人は「鷺宮大
明神」と呼ぶようになった。鷺ノ宮駅の南側の、屈曲して流れる妙正寺川に囲まれて建ち、現在は鷺宮八幡神社
と言われている。隣接する真言宗豊山派の福蔵院は、鷺宮大明神の別当寺として 1500 年代(室町時代)に
開山された。(鷺宮八幡神社はこちら <https://yahoo.jp/qmZsYH>)

鳥の名前の駅の次は植物の名前になる。**下井草**は、その昔は井草村と言われ妙正寺池と善福寺池の周辺が
低湿地で藺草が生えていたことに由来するという説が有力なようだが、他説・多説あるらしい。井草村は下井草
村と上井草村に分かれていたこともあり、「井草」は広く一帯を呼ぶ地名でもあったらしい。

中学生の頃に、父に頼まれて印刷物(校正用のゲラ刷り)を下井草のある学校へ届けたことがある。西武線の
北側を歩くと田園風景が広がり、これが武蔵野なのかなと驚いた。我が人生初の西武新宿線の旅だった。

井荻という駅名は存在するが、町名は存在しない。明治22年の町村制施行にあたり、上井草村・下井草村・上
荻窪村・下荻窪村の四か村が合併して、旧村名から一文字ずつ出し合って合成地名「井荻村」が誕生した。の
ちに井荻町となったが、昭和14年の町名変更時に消滅してしまい、駅名だけが残った。

上井草まで来てひとつの疑問に突きあたった。上井草と下井草の位置関係、つまり何が基準で「上下」になっ
たのかということ。帰宅後に調べて見たら、「京に近い方が上」ということから西側が上井草で、東側が下井草
となったということがわかった。正保年間(1645 年頃)に井草村が上・下に分れた時のことらしい。

地図を見ると井荻駅から上井草駅あたりまで、線路の南側が縦横に整然と区画されている町並みがあるのが
気になった。江戸時代の農地開拓の名残か、関東大震災のあとの再開発の跡か、それとも終戦後のことか？

今は都立杉並工業高校・井草中学校・都立農芸高校などがある住宅街になっているが、三谷・四宮など古い
地名(小字)を冠した小学校なども残っており、何か歴史がありそうな気配を感じるが、調べはここまでとする。

都立家政駅から東伏見まで、西北西に向かう直線の進路が続いている。千川通りを横切ると**上石神井**駅。
駅から北へ 1.5Km 程歩くと石神井公園の三宝寺池の南岸に石神井城跡がある。現在の住居表示で見ると、
石神井川の上流にあるのが上石神井で、下流にあるのが下石神井のようである

武蔵関、豊島氏が石神井城を押さえていた頃に配下に関(関所)を設けていたことから生まれた「関」という説
と、石神井川に「堰」があったことが起源であるとする説があるが、真偽のほどは素人の私にはわからない。

東伏見駅は開業当時には「上保谷駅」だった。1925 年(大正 14 年)に西武鉄道が自社で所有していた土地
2500 坪を早稲田大学に寄付し、大学の総合運動場が開設された。そして 1927 年(昭和 2 年)に上保谷駅を
開業し、駅周辺に宅地開発も進めた。さらに、京都の伏見稲荷神社を勧請して東伏見稲荷神社を祀り、石神井
川の北岸に敷地 7000 坪を無償貸与した。その結果、1929 年(昭和 4 年)に駅名は東伏見と改称した。

(東伏見稲荷神社はこちら <https://yahoo.jp/bycQBK>)

西武柳沢は「せいぶやぎさわ」と読む。1927年(昭和2年)に開業したが、この時長野電鉄に「柳沢」という駅が存在することから、「西武柳沢」という駅名になった。環状八号線から分岐してきた富士街道が駅の北側を走っている。富士街道は、その昔大山参りや富士講の旅人が歩いた道だったらしい。

西北西に向かって走っていた電車は、西武柳沢駅の手前あたりからやや西南西方向に進路を変える。

田無、2001年に田無市と保谷市が合併して「西東京市」という厳めしすぎる名の市が誕生した。その結果、田無という地名は、西東京という重たい名前の下に隠れてしまった。田無という地名は、「畑作中心で田がなかった」ことに由来するという情報が有力らしいが、多説あり決め手を欠くものばかりだとか。

西南西に進路をとっていた電車が緩やかに右カーブして北西に向かうようになると**花小金井**駅に到着。ここからは小平市になる。「小金井」と名が付くにもかかわらず、ここは小金井市ではない。1927年(昭和2年)に開業したこの駅は、小金井公園や玉川上水の桜観光を目当てにした駅だった。

北西に向かって一直線に走っていた西武新宿線が、東西に走る青梅街道を跨ぐところで、心持ちS字型にカーブする。当初は直線だったが、青梅街道との立体交差工事の時に曲がってしまったのではないかと、勝手に想像(推理)してみた。(なぞのS字カーブ <https://yahoo.jp/2oI5Yu>)

小平駅は東村山・本川越方面と拝島方面とが分岐する拠点駅。小平村は明治22年の町村制施行の時に誕生した。小川村・小川新田・大沼田新田・野中新田与右衛門組・野中新田善左衛門組・鈴木新田・廻田新田が合体して新しい村ができた。村の名前は、一番早く開拓された小川村の一文字「小」をとり、一帯が広く平らな土地であることから(「平」)小平村となった。合併の経緯でわかるように、開拓に携わった要人の名前が地名になっており、小川村も明暦3年(1657年)に小川九郎兵衛が開拓に着手した。「平」とは言え、この辺りは海拔70~80mの高さになる。

小平駅を出てしばらくは、右側を本川越へ向かう本線が並走する。小平霊園の南端で左にカーブして西に進路をとるとなると間もなく、国分寺から来る多摩湖線を合わせて**萩山**駅に入る。駅は東村山市だが、南側に小平市が迫っている境界区域になっている。開業当時は多摩湖線の保線基地だったが、多摩湖線を西武新宿に乗り入れられるようにすることになり、現在の位置になり線路が接続された。

秋になると萩の花が美しく彩ったことからこの地名となったが、「萩山」という山があったわけではないらしい。北西に進む多摩湖線を離れて西に走る。武蔵野線と交差するが、武蔵野線はトンネルの中なのでわからない。そして、突然のように左折して南に向かうようになり、国分寺線と合流して**小川**駅に入る。

前述のように、「小川」は小平村で一番早く開拓された地域であり、小平市の西端になる。小川・小川新田の面積の広さから見て、開拓に従事した小川氏の力を計り知ることができる。

小川駅を出ると電車は再び西に進路を変えて東村山市との境を走り、野火止用水と合流した所が**東大和市**駅。1889年、清水村・狭山村・高木村・奈良橋村・蔵敷村・芋窪村が「高木村外五ヶ村組合」を結成、1919年に大和村となった。それまで政争が耐えなかったことから六ヶ村が「大いに和して」を目指すとして大和村と名付けた。1950年に駅が開業した時には「青梅橋駅」だった。線路の北画を流れる野火止用水にかかる橋の名前が駅名になったが、現在は暗渠になってしまいこの橋は存在せず交差点の名前だけが残っている。

Y君の父上が亡くなった時に通夜で訪れた。青梅橋駅を下りると踏切と暗闇だったことを記憶している。もう半世紀余り昔のことになってしまった。(青梅橋はこちら <https://yahoo.jp/uJY6yd>)

1970年市制移行にあたり、神奈川県に大和市があることから「東京の大和市」ということで「東大和」を市名にした。その結果、1979年に駅名も「東大和市」と改称したが、駅は多摩湖の北岸まで広がる東大和市の南端にあるので、利用客の半数は小平市民かもしれない。市の北部の多摩湖南岸には武蔵大和という駅もあり、他所から来た人は間違えやすい。駅の南側に野火止緑地公園と都営薬用植物園があり、散策路としては最適。南西に進み玉川上水に接近して並走することわずかで**玉川上水**駅。拝島までの延伸が実現する前はここが終着駅で車庫もあったが、今や多摩モノレールと交差する近代的な拠点駅になってしまった。

2010年に多摩センター駅から上北台駅までの全線を走る車窓の旅をしたことがある。一段高い所を走るので周辺の景色を楽しむには絶好の路線だった。

玉川上水駅を出ると、西北西に向かって砂川の平原を走り、南側の車窓に玉川上水の流れに沿った緑地が

付かず離れずついてくる。この沿線では一番の和みの景観かもしれない。

広い砂川の平地の中に**武蔵砂川**駅がある。殆ど住宅地ばかりになってしまいはしたが、歩いて見ると所々に広めの農地が点在し、立川市の農業を支えている地域だとわかる。主要な農産物のひとつが「砂川のウド」で、収穫の時期に農協の売店を覗いて見たら、立派な箱に収められて何万円もするようなブランド品だった。10数年前に難病と闘うS君を見舞った日のことを思い出しながら、地図の上の景色と車窓の景色とを確かめてみた。立川が米軍基地の町だった頃には、立川駅周辺は横文字の店と兵隊ばかりで怖くて歩けず、砂川は基地の拡張に反対する農民運動と学生運動とで独特の空気の流れる所だった。

五日市街道を東から西へと向かうと、立川通りとの交差点が「砂川九番」、幸町団地の辺りが「砂川八番」、モノレールと交差するところが「砂川七番」と番号順に地名がついていた。現在は道路の交差点の名前として残っているものもあるが、消えてしまったものもある。多摩川に近いところから順に番号がついているので、玉川上水の開削に合わせて開拓が進められてきたことを示すものと思われる。「番号がついた地名」に興味を感じて、国立の自宅から自転車で訪れて五日市街道を番号順に走った日を思い出す。

(砂川七番はこちら <https://yahoo.jp/u8X6nQ>)

玉川上水駅から西南西に進路をとった電車は、立川市と昭島市の境界にある**西武立川**駅に到着。立川市の北西端で、しかも中央線立川駅と乗り換えられる訳でもないのに、何故あって「立川」という駅名に拘ったのだろう。10数年前に来た時には、駅の南側には昭和の森ゴルフクラブが広がり、北側には住宅地の間に点在するやや広めの土地を持つ農家があった。地図で見る限り、様子はさほど変わっていないようで安心した。

砂川の開拓地が街道を軸にして南北に楕のように広がっている様子が地形図からもうかがえる。

西武立川駅を出ると右手前方に奥多摩の山並みが見える。とりわけ、大岳山の特徴的な頂が目立ち、「ここまで来たな」の感が強まる。電車は南西方向に向かった後、八高線の線路に近づいてから終点の**拝島**駅に入る。



駅に入る手前で右に分岐する引込線があるが、地図で見ると米軍横田基地に入っているようだ。

時計を見ると11時46分、西武新宿から1時間13分の各駅停車の旅だった。拝島は海拔120mほどの多摩川の河岸の台地になっている。駅舎の中の展望コーナーからは秋川奥の山々が一望できる。富士山も見えるはずではあるが、今日は濃い霞がかかっている見えなかった。(拝島駅はこちら <https://yahoo.jp/gzmyr1>)

駅前を散策しながら遠望の山並みを確かめてみた。(左画像: 駅前からの大岳山) 新しくなった拝島駅は、どこぞの新幹線の駅のような見栄えが良い建物ではあるが、

歩いている人の数が少ないし、再開されたばかりで駅前には何も無い。一渡り眺め歩いた後、餃子屋を見つけて昼食をとった。食後は駅の東口に出て玉川上水の岸辺を散策。4月の中旬にもならないのに23度もあるような温かさで、汗ばむような散策になった。

帰路は14時発急行西武新宿行で45分間の惰眠を楽しんだ後、高田馬場で旧友との再会と会食懇親のひととき。好天に恵まれて、多目的な一日を楽しんだ。

以上